

本による地域振興の現状と課題

白坂 ちひろ

近年、日本において少子高齢化が進んでおり、特に地方において人口減少が社会問題になっている。一方で、インターネットの普及やそれに伴う電子メディアの発達による「読書離れ」・「活字離れ」も注目されるようになった。この2つの大きな課題の解決策として、本による地域振興を図ろうとする地域が見られるようになった。本による地域振興は全国各地で徐々に拡大しつつあり、その内容から活動時期まで様々である。しかし、それらがすべて日本における2つの大きな社会問題の解決に繋がっているとは必ずしも言えないのではないかと考えられる。

地域振興に関する先行研究としては、上記にも述べた「まちづくり三法」が制定されたことにより、中心市街地の活性化を模索するための研究が多くみられた。一方で、地域振興の中でも、本を主体としたものに注目された先行研究は少なく、また、その中に、本による地域振興を行っている地域を複数対象とし、その活動状況を比較調査している研究は見られなかった。よって本研究は、日本全国における本による地域振興の現状を網羅的に把握すること、2つの社会問題を同時に解決しうる手段としての地域振興活動の課題を考察することを目的とする。

本研究では、「本による地域振興」の定義を独自に設定した上で、全国紙4紙の新聞データベースを用いて網羅的に調べ上げた関連地域の中から、「地域振興」の定義に当てはまるもののみを対象として選定した。それから、対象とした地域を、その活動内容によって大まかに類型化し、それぞれについて課題を考察した。また、八戸市の市営書店「八戸ブックセンター」における活動を取り上げ、活動の現状や今後の計画等についてインタビュー調査を実施した。

結果、対象地域の活動について、その主体から「行政主導または官民協働」型と民間主体の2つに分けられ、活動内容から『本のまち』型と『読書のまち』型、「まちなか図書館」の3つに分けられた。また、現在活動が見受けられないものは、「行政主導または官民協働」型に比べて民間主体の活動に多いこと、対象地域の活動について成果・指標があまり見受けられなかったことなどが分かった。

以上のことから、行政・民間同士の連携を積極的に行うこと、実施した各活動について様々な指標に基づいた評価を行うこと、また、行政主導の事業については、アンケート調査等により住民の意見を定期的に取り入れることなどが、本による地域振興活動における今後の課題として挙げられた。

(指導教員 池内淳)